＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：「中世キリスト教から宗教改革へ」

Ｂ．目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義Ａ・Ｂ」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

Ｃ．到達目標

・キリスト教学をテーマとした研究（卒論・修論）を行うために必要な方法や知識を身につけることができる。
・キリスト教研究に関する広い知見をもとに、自主的な研究に取り組む能力を養う。
・キリスト教学をテーマとした研究を発表するための訓練を受けることができる。

Ｄ．確認事項

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火３・木３）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

成績は、レポートにて。

Ｅ．授業スケジュール

初回のオリエンテーションに続いて、次のような項目について、講義が進められる。一回の講義で一つの項目が取り上げられる。

０．オリエンテーション、ゲルマン民族移動から中世へ	10/4
１．中世キリスト教世界のダイナミズム	10/11
２．西欧キリスト教世界の形成	10/18
３．キリスト教修道制１	10/25
４．キリスト教修道制２	11/1
５．教皇と皇帝	11/8
６．イスラームと 12 世紀ルネサンス	11/15
７．スコラ的文化総合と大学の時代	11/22
８．自然神学の諸問題	11/29
９．フィオーレのヨアキム	12/6
10. 民衆・市民の新しい宗教性	12/13
11. 宗教改革の意義	12/20
12. 宗教改革の多様性	12/27
13. 寛容のネットワーク	1/10
14. 宗教戦争の帰結	（1/17）
15. フィードバック	

フィードバックの具体的なやり方については授業にて説明を行う。

導入

ゲルマン民族移動から中世へ

＜年表＞

１．年表１：ゲルマン関連

375:ゲルマン民族大移動の発端（フン族に追われ東ゴート族がドナウ川を渡り、東ローマ帝国内へ避難）
395:ローマ帝国東西に分裂、西ゴートのアラリックがギリシャに侵入
406:リーメス（ライン川とドナウ川に沿ったローマ帝国の国境防備線）の大決潰
410:西ゴート、ローマ侵入
431:ヴァンダル族、アフリカ侵入
449:アングロ・サクソン族、ブリタニカ侵入
455:ヴァンダル族、ローマ占領
476:西ローマ帝国滅亡
482:フランク王国、メロヴィス１世(482-511)、メロヴィング朝（486-751）
498:クロヴィス、カトリックに回心(受洗、498)
516:ブルグンド、カトリックに回心
603:ランゴバルド、カトリックに回心
c.610:イスラームの成立
642:サラセン軍、エジプト侵入
661-80:ウマイヤ朝
711:サラセンによって西ゴート王国の滅亡
732:ツール＝ポアチェーの戦（カール＝マルテル、サラセン軍を破る）
751:ピピン、カロリング朝(751-843)
756:ピピン、ラヴェンナ太守領を教皇に寄進
768-814:チャールズ１世（大帝、カール、シャルルマーニュ）
c.789:ノルマン人のイングランド侵入
800:セルビア人、キリスト教に帰依
843:フランク王国三分
950:ハラルド（デンマーク王）のキリスト教公認

２．年表２：キリスト教会関連

354-430:アウグスティヌス
392:キリスト教の国教化
406:ウルガタ（Vulgata、ラテン語訳聖書）の完成
440-61:レオ１世、教皇権の主張
525:モンテカッシーノ修道院創建（ベネディクト修道会の成立）
590-604:グレゴリウス１世、教皇尊称の普遍化、グレゴリオ聖歌
649:ラテラノ公会議（キリスト単性論を排斥）

（１）ゲルマン大移動のもたらしたもの

０.「半島のヨーロッパ」(佐藤、１)、「先史時代から「ヨーロッパ」への異民族の侵入が常態化」（２)、「ヨーロッパ半島への異民族の東方からの反復的来襲」（３）

１．古代から中世への転換期：ローマ帝国からポスト・ローマ国家（小国家時代）へ
　　政治的統合から宗教的文化的統合へ

２．移動＝民族形成
・民族移動後の数百年＝エトノス生成、流動性の高い集団から、民族と呼ばれる政治集団が創出
・ローマ的秩序の外部としてのゲルマン　cf. ローマによるガリア征服（BC.58-51: ガリア戦争)、征服の対象としてのガリア人、ケルト人。それに対するゲルマン人の異質性（民族的統合以前)、ライン川の向こう側＝「まつろわぬ土地」

３．従来の学説
「いわゆる暗黒時代」「早くからローマ文化および教会との直接の交渉を有したフランク族のカロリング朝王廷と、ローマの外にビザンティン帝国の媒介によってギリシア文化の片鱗に触れることのできたイギリスの修道院とは、すでに八世紀以来中世文化の曙光を見たが、ドイツ人の目覚めは著しく遅れて、政治的にはオット一世以来、宗教的・思想的・文化的には第十一、二世紀にもなお素朴の域を脱し得なかった。」（石原、551）
↓
古代の終焉（厳密には西ローマ帝国の滅亡)、暗黒？
しかし、地域によっては、古代と中世の連続性は一定程度確保された。
　アフリカでは、ローマ帝国の徴税制度が機能し続けた。
　古代と中世との関係性については、地域的な多様性に即した詳細な考察が必要。

４．古代の終焉の理由：巨大すぎた領土と経済構造の変動がマクロな要因となった。
　そこにゲルマンの大移動が起こり、土台から崩壊することになる。
「四世紀のローマ帝国でめだった現象は、貧富の差が激しくなったことであった」、「大都市だけが栄え、中小の都市は廃れていった。」（ブラウン、28）
「大きくなりすぎたローマ帝国は、時間と距離を敵に回すことになった。資産の評価がいくら良心的に行われるにしても、広大なローマ帝国で資産の正確な再評価を頻繁に行うことは不可能であった。そこで脱税が常態化し、運の悪い者に負担が集中することになった。」（29）

（２）ゲルマン民族とキリスト教
ローマ帝国による国教化にもかかわらず、国家自体（西ローマ帝国）の崩壊により、政治権力との関係構築をゼロから行うことが必要になった。
５．西方教会（ローマ教会）の地位の確立：　レオ１世、グレゴリウス１世
ニカイア公会議第六決定文（ローマ、アレクサンドリア、アンティオキアの司教座「総大司教区（パトリアルカ)」として認める)、第七決定文（エルサレムに栄光の位を与える)。コンスタンティノープル公会議（381 年）に、コンスタンテイィノープル司教はローマに次ぐパトリアルカの地位を獲得。→パパ（ス）
ローマ司教のみが「パパ＝教皇」と呼ばれることになるのは６世紀、コンスタンティノープル司教は総大司教と名のる。

６．ゲルマン民族のキリスト教化：まず異端的キリスト教が次に正統キリスト教が。
ゴート族はまずアレイオス派キリスト教を受け入れる。

７．西ゴート人・ウルフィラ（Wulfila. 311-382）
・ゲルマン民族の大移動という動乱のなか、彼は文字を創り（ギリシャ語とラテン語から文字を借りる。２文字はルーン文字から）、聖書を母語に翻訳し遂げた。ゴート族への伝道。
・「銀文字聖書」（６世紀の写本、スウェーデンの国宝）。東ゴートのテオドリクス王に献呈。
・＜ God ＝神＞のはじまり。

８．カトリックへの再改宗＝西方教会の基礎の確立
↓
アレイオス派キリスト教とカトリックとの対立。
ボエティウスは、投獄され（『哲学の慰め』を執筆）、国家（東ゴート王国）の裏切り者として処刑（524 年）。
ゴート族、後に、アレイオス派から、カトリックへの改宗。

＜参考文献＞
０．ピーター・ブラウン『古代末期の世界――ローマ帝国はなぜキリスト教化したか？』
刀水書房。
１．佐藤彰一『中世世界とは何か』（ヨーロッパの中世１）岩波書店、2008 年。
２．石原謙『キリスト教の源流』岩波書店。
３．Ｈ・Ｉ・マルー『教父時代』平凡社ライブラリー。
４．小塩節『「神」の発見――銀文字聖書ものがたり』教文館。
５．河崎靖『ルーン文字の起源』大学書林。
６．Ｍ・Ｄ・ノベルズ他『中世世界の成立』平凡社ライブラリー。
７．Ｊ・ペリカン『中世神学の成長（600-1300 年）』教文館。
８．リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社、『中世思想史』平凡社ライブラリー。